

2012年12月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾

迷いを越えて

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「提婆達多品」

1. 提婆達多品の概要

- (1) 釈迦牟尼世尊と提婆達多の前世の物語。
- (2) 釈迦牟尼世尊が、提婆達多に授記する。
- (3) 龍王の八歳の娘が成仏する。

2. 釈迦牟尼世尊と提婆達多の故事

(1) 真実の教えを求める国王

前世におけるお釈迦さまは、ながいあいだ国王の地位にありましたが、その安楽なくらしに満足せず、真実の教え（妙法）を求めつづけておられました。そして、その教えを得るためには、自己の生活のすべてを犠牲にしてもかまわないとお考えになっていました。そして、ついに「世のすべての人を救う教えを説いてくれる人があれば、わたしは一生涯その人につかえて、身のまわりの世話をするであろう」というおふれを全国にだされたのです。

(2) 仙人につかえる

ところが、ひとりの仙人がやってきて、「わたくしは、世のすべての人を救う妙法蓮華という教えを知っています。もし王さまがおふれのとおりのことをなさいますなら、かならず説いてさしあげましょう」と申しました。

王は、そくざにその仙人につかえました。木の実を集めてきたり、水を汲んだり、生活万端の世話をしたばかりか、地べたにうつぶせになって師の仙人の腰かけになるということまでしたのです。そういう努力をしながら、その最高無上の教えを聞くことができたのです。

(3) 仙人は提婆達多

お釈迦さまはこの話をなさって、「わたしが仏の悟りを得たのは、前世のそうした修業が大きな遠因となっているのですが、じつはその仙人というのは、あの提婆達多の前世の身にほかならないのです。つまりわたしは、提婆達多という善知識（善い友人）をもちえたおかげで、こうした仏となり、ひろく衆生を救うことができるのです。」とおおせられました。

(4) 提婆達多に授記する

しかも、「提婆達多は、これからのちながいあいだ修業することによって、かならず仏となるであります」と、成仏の保証まであたえられたのです。

3. 提婆達多

提婆達多は釈迦牟尼世尊の従兄弟です。釈迦牟尼世尊のもとで熱心に修業したこともありましたが、あまりにも我執が強かったために道を得ることができませんでした。

提婆達多は釈尊教団から離れて阿闍世太子（あじゃせたいし）に取り入り、しばしば釈迦牟尼世尊のお命を狙いましたが、ことごとく失敗しました。やがて阿闍世太子が釈迦牟尼世尊に帰依したため、提婆達多は庇護者を失い、孤独な最後を遂げたと伝えられています。

4. 悪人成仏

(1) 提婆達多への授記

釈迦牟尼世尊は、「提婆達多は、これからのちながいあいだ修業することによって、かならず仏となるであります」と、成仏の保証まであたえられたのです。（前掲）

(2) “感謝”と“授記”の関係

今世における提婆達多の悪事が、お釈迦さまのお悟りを深める因となったからとて、本質的には、何も提婆達多の功績ではありません。提婆達多の“悪”がそれで帳消しにされるものでもありません。ですから、提婆達多にたいする“感謝”と“授記”のあいだには、なんらの関連もないのです。（同p. 124）

(3) お釈迦さまの真意

お釈迦さまは、まえからくりかえしてお説きになってこられた“すべての人間は平等に仏性をもっている”という真実を、人々がアッとおどろくような劇的な形をとって、人々の胸につよく印象づけるために、とつぜん提婆達多の例をもちだされたのです。

まさしく、万人を仏性の自覚にみちびくための、お釈迦さまのあざやかな方便だったのです。

（同p. 124）

5. 仏性を信じる

釈迦牟尼世尊の「提婆達多が如何に悪人であろうと、やがて目覚めるであろう、目覚めた上は修行を積んで成仏するであろう」というお話を聞いて、「その通りに違いない、ありがたいことだ」と受け取る人は、あらゆる人の本質は仏性であるということを、心から信じている人です。

このような人は、地獄・餓鬼・畜生というような迷いに入ることはなく、仏の教えに出会い続けることができるであろうと、釈迦牟尼世尊はおっしゃいます。

6. 煩惱

(1) 煩惱から離れることはできない

煩惱はすべての人間がもっています。煩惱から完全に離れてしまうことは、ふつうの生活をしている在家のものにとっては、とうてい不可能なことです。

(2) 悪

煩惱をそのまま行動にうつしますと、悪となります。

(3) 煩惱に善い方向をあたえる

煩惱に善い方向をあたえれば、善をなすことができます。

7. 私たちの修業

私たちは、自分の煩惱に支配されることをやめなければなりません。そのためには、自分の煩惱に善い方向をあたえて、世のため人のためになる行動をすることを目指したいと思います。

そのために智慧を磨き、慈悲心を深め、実践力を高める修業をします。

8. 善知識

(1) 善知識

「善知識」とは、「善い友だち」という意味です。善い友だちを持てば、その影響を受けて、正しい道を歩むことができます。

善い友を持つことは、人生の大事であると、釈迦牟尼世尊はおっしゃっています。

(2) 提婆達多は善知識

お釈迦さまが提婆達多を善知識と呼んだことについて、庭野日敬師は次のように述べています。

「なぜ前世の物語にことよせて、“提婆達多が善知識に因る”とおおせられたのでしょうか。それは、お釈迦さまのような澄みきった心の持主ともなれば、よいこともわるいことも、すべてが悟りの因となるからです。

それゆえ、天地の万物にたいし、身の回りに起こるすべてのことがらにたいし、ご自分の悟りを助けてくれるものとして、自然と感謝のお気持ちをもたれるのです。」（『法華三部経 各品のあらましと要点』p.123）

(3) すべてが善知識

自分が真理に定まっていますと、いかなる出来事に遭遇しても、いかなる人に出会っても、そこから真実を悟ることができます。あらゆる人、あらゆるものごとがすべて善知識になるのです。

9. 竜女の話

文殊師利菩薩は、海底の龍宮で教化活動をしていました。そのなかに、八歳になる龍王の娘がいました。龍王の娘は釈迦牟尼世尊の前に進み、この宇宙と同じくらいの価値がある宝珠を、釈迦牟尼世尊に捧げますと、釈迦牟尼世尊は即座にお受け取りになりました。

娘は一同に向かって、仏さまが宝珠をお受け取りくださったよりも早く、私は成仏しますと言いました。そして一瞬の間に男子となって菩薩の行を行ない、南方無垢世界で仏の境地に到り、人々に教えを説いたのでありました。

10. 女人成仏

(1) 素直な心

「八歳の娘」というのは、「幼子のような素直な心」を象徴したものです。

龍女が捧げた宝珠を、釈迦牟尼世尊が即座にお受け取りになったというのは、龍女の信心と仏さまのみ心が、瞬時に直通したということです。

幼子のような素直な心で、仏さまの教えを信ずれば、その瞬間からわれわれは仏さまと溶けあい、一体になることができますのです。宇宙がわがものとなってしまいますのです。

ここが、龍女の話でもっとも重要なところだと思います。

(2) 変成男子（へんじょうなんし）

龍女が男子の姿となったことを、変成男子と言いますが、これは当時のインドの人々の心理に応じた表現であるようです。

妙法蓮華経の修行も、仏の悟りも、男女の別は関係ありません。そのことを表現したとみることもできます。

11. 男女平等

現象としてあらわれている男女には、そのすがた形・子孫をふやすための役目・性質の特徴・はたらきのうえの得意不得意など、いろいろな先天的なちがひがあります。

形のうえではそのようにちがひのある男女が、それぞれ先天的な特質を生かしあいながら、なかよく家庭をつくり、社会を運営していくところに、ほんとうの男女平等があることを忘れてはなりません。これが、倫理的な、また社会的な、男女平等の道理です。（『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 128）

1 2. 信

(1) 「信」とは

「信」とは「ほんとうだと思って疑わない」「真実だと思って疑わない」ことです。

「信用（信じて用いる）」「信頼（信じて頼る）」「信任（信じて任せる）」などの言葉があります。

(2) 「信仰」とは

神、仏、絶対者などを深く信じ、偉大なものとして崇め、その言葉や教えに絶対的に従うことを信仰と言います。

(3) 信仰の対象を見極める

信仰の対象を知的によく理解し、信仰の対象として間違いがないと確信したうえで、はじめて信仰するという慎重な態度が求められます。

1 3. 無条件の信仰

真実だと分かったら、素直に受け入れ、素直に信じるのが、無条件の信仰です。

無条件の信仰からは、無条件の実践が生まれます。

1 4. 条件付きの信仰

自分に都合の良いことを起こしてくれたら信じるというような不純な信仰を、条件付きの信仰と言います。

条件付きの信仰をする人は、ひたすら、貪欲（とんよく、誤まった欲望）を追求し続ける人です。

1 5. 迷い

(1) 真実を信じない

真実を信じない、または信じるができないという迷いを持つ人がいます。このような人は、正しい生き方をすることができません。

(2) 真実に対する迷いの例

自分本位にとらわれていて、真実であるとかないとかには無頓着という迷い。

真実であると分かっても、信じようとしないう迷い。

真実であることに対して、反感を持つ、怒りを起こす、憎しみや恨みなどをいなく、妬むなどの迷い。

真実から目を逸らし、逃避しようとする迷い。

自分が真実から外れていることを自慢したり威張り散らしたりする迷い。

真実でないものを真実だと思って信じる迷い。